

水俣病事件 一人間の尊厳を取り戻す闘い

～父川本輝夫と家族の物語～

水俣市立水俣病資料館

語り部 川本愛一郎

はじめに

私は、1958年（S33年）水俣生まれの水俣育ちである。来年3月で62歳となる。私は、幼少期は祖父、父、母、私、妹の5人家族である。祖母は私が生まれる10年前に亡くなっている。

祖父は、明治44年（1911）16歳の時天草から、仕事を求めて水俣に来た。その後、チッソに就職し、祖母と結婚し貧乏人の子だくさんという言葉があるが、8男3女の子宝に恵まれた。父は、7番目の末弟である。父の兄弟のうち3人は幼少期に亡くなった。

父の上の兄たちは、ほとんどが婿養子として出て行った。父は、末弟であったが川本家を継いだ。ちちは、生まれた時は、体が小さく一升ますにちょこんと入るくらいだった。近所の人は、これは育たないだろうと思ったそうである。かわいそうになって『リンゴ汁がいいよ。』と祖父母にアドバイスしたそうである。祖父母は、懸命に働いて高価なリンゴを買ったそうである。

祖母カナは、狭い畑を耕し子供たちを育て上げた。祖母が作る瓜やスイカはうまかったと父が話してくれたことがある。祖母は、S23年に亡くなった。

祖父は、昭和21年（1946）50歳でチッソを定年退職して水俣漁協に加盟し水俣湾で一本釣りの漁師を始めた。父は、祖父のことを「近所の取り頭＝魚釣りが上手」と言っていた。祖父が釣ってくる魚は食卓をにぎわせた。

昨年、叔母（父の姉）の49日法要に出席した折、S24年生まれの従姉妹から「私は、愛一郎のオムツも替えたのよ。」と言われ、頭が上がらなかった。従姉妹家族は、私が生まれたころは、私たちと同居していた。従姉妹が「祖父と一緒に船で釣りに行ったことを覚えている。タコを釣ったと思う。みんなで祖父が釣ってきた魚を食べていた。」と話した。

従姉妹は4人兄弟であるが、2人は癌でなくなっている。4人のうち、2人は医療手帳を持っているが、1人は棄却された。叔母は医療手帳を持っていた。

祖父の死

祖父は、私が小学2年生の時に、水俣病の劇症型で苦しみながら亡くなった。発病してから亡くなるまでの3年間、けいれん発作や手足のシビレ、せん妄状態での自殺企図などで苦しんだ。今でも祖父が座敷の奥で寝ている姿を覚えている。古い家で、土間にはかまどがあり、天井には明り取りのガラスがはめてあった。

水俣病の劇症型で亡くなった祖父だが、水俣病症状がそろっているにもかかわらず未認定である。祖父は、水俣病未認定患者と呼ばれ、父は、水俣病認定患者、母と妹は、水俣病医療手帳を持っているので、水俣病医療手帳保持者と呼ばれており、私は特措法での水俣病被害者手帳を持っているので水俣病被害者手帳保持者と呼ばれている。

私たちは5人家族だが、4通りの呼ばれ方をされている。

水俣病事件

私は、「水俣病」という言葉を使わないようにしている。じゃあ、どんな言葉を使うかという「水俣病事件」という言葉を使っている。

熊本県の小さな水俣市で何が起こったのか、水俣病という「病気」が起こったのではなく、「水俣病事件」という「傷害・殺人事件」が起こったのである。

「事件」としてとらえると、構図が明確になる。主犯は「チッソ株式会社」、そして主犯の犯罪を見て見ぬふりをした共犯が「国・県・市の行政」と、主犯の犯罪を矮小化したり隠ぺいした「医師・化学者」である。水俣病事件は、産学官の三者が三つ巴で起こした大量無差別殺傷事件である。

チッソは一大巨大企業：113年の社歴

チッソは、113年前の1906（M39）に野口遵が起こした「曾木電気」という電力会社から始まり、1908（M41）に余剰電力で化学製品（＝肥料）を創る「日本窒素株式会社」を水俣で創業した。当時の水俣の有力者たちが熱烈な誘致運動をしたそうである。

曾木発電所から水俣市までの電柱設置や水俣市内の土地の格安提供、水俣川の水の採取などです。提供された工場用地は、東京ドームの11個分、東京ディズニーランドとほぼ同じである。

また、チッソは、戦前は北朝鮮に大きなダムを複数（12か所の発電所）建設し、その電力で8か所ほどの工場を経営していた。労働者は、最盛期は日本人が2万人、朝鮮の現地の人が6万人くらいだったようである。チッソは、新興財閥と呼ばれ「朝鮮の野口か野口の朝鮮か」と新聞でも呼ばれる勢いだった。当時は、チッソに技術者として入るのには、東京大学の工学部のトップレベルでないと入れないと言われるくらいだった。チッソの子会社や傘下企業はたくさんあるが、有名企業に旭化成、積水化学、マツダ自動車などがある。

戦前（1931．S6）には、昭和天皇がチッソ水俣工場を巡幸されている。また、（1935．S10）には、旭ベンベルグ絹糸延岡工場を巡幸されている。

その巡幸記念碑がチッソ水俣工場敷地内に建っているが、戦時中は、チッソも爆薬や爆弾を創っていたことから米軍の空襲を受け、昭和天皇の巡幸記念碑の鳳凰の右の羽の付け根に米戦闘機の機銃弾の弾痕が今でも残っている。

チッソと国のつながりが戦前からあった。

水俣病事件はなぜ起こったのか？

私は、水俣病事件の根本に「差別」があると思う。戦前での北朝鮮での日本人労働者と朝

鮮労働者の差別、日本人労働者の中でも、幹部と現場労働者の差別などです。当時のチッソ経営幹部の言葉に「労働者を人と思うな。牛馬と思え。」という言葉がある。

敗戦を迎えチッソは、全ての海外資産を失い技術者たちも日本へ帰ってきた。

そして技術者たちは、チッソの本拠地である水俣に集まり戦後の復興に臨んだ。

この時不幸だったのは、化学工業の技術は世界有数レベルだが、人や命を大切にしない差別的な意識が強かったことである。

〔1〕 父と祖父と私たち家族

1. 祖父の生い立ちと結婚

祖父は、明治 28（1895）年 6 月 4 日に熊本県天草郡牛深市茂串に島田家の 3 男として生まれた。半農半漁の貧しい一家だった。明治 44（1911）年 7 月祖父は 16 歳の時、貧しさから脱するべく新天地を求めて対岸の水俣市へ渡り、跡継ぎのいなかった川本家の養子となった。

当時の貧しい家庭では、長男以外は他家の後継ぎという名目で養子に入ることが多かった。（のちの話であるが、父の兄弟たちも長男を除いて次々と養子にいった。）

祖父は、チッソに硫酸工程職員として入職した。当時の水俣は、魚湧く豊穡の海だった。仕事を終えた後は、家から 5 分とかからない水俣湾で釣りをしたり貝、ビナ、ナマコを取ったりして食卓のおかずの足しにしていた。

大正 3（1914）年 9 月、水俣町出月の村山カナと結婚し、8 男 3 女の子宝に恵まれた。昭和 6 年（1931）8 月父は川本家 7 番目の出生で男兄弟では末弟であった。

生まれた時は、体が小さく一升ますにちょこんと入るくらいだった。近所の人は、これは育たないだろうと思ったそうである。かわいそうになって『リンゴ汁がいいよ。』と祖父母にアドバイスしたそうである。祖父母は、懸命に働いて高価なリンゴを買ったそうである。

3 名の兄弟は、幼少時に死亡した。祖母カナは、狭い畑を耕し子供たちを育て上げた。祖母が作る瓜やスイカはうまかったと父が話してくれたことがある。

父と水俣病事件：チッソの有機水銀触媒使用開始は、昭和 7 年（1932）である。

父は、その前年に生まれた。父の人生は、水俣病事件と重なっている。

2. 川本家の暮らし

昭和 21 年（1946）、チッソ定年後、祖父は一本釣りの漁師となった。

貧乏人の子だくさんのご他聞にもれず貧困にあえぐ川本一家だったが、近所の取り頭と呼ばれた漁上手の祖父が獲ってくる新鮮な魚介類が、一家の食卓を賑わした。貧乏だけど幸せな一家団欒の日々だった。

※幸せについて：「当たり前で生きて 当たり前で死ねること」
水俣病事件では、憲法第 25 条〔生存権〕と憲法第 13 条〔幸福追求権〕（個人の尊重と公共の福祉）の両方が一度に奪われた。

祖父は、水俣市漁協に、昭和 24 年 7 月 7 日に加盟し、水俣病劇症型で寝込み漁ができなくなった昭和 38 年 3 月 31 日に脱退した。

自宅近くの坪段という小さな漁港で、祖父の櫓漕ぎ船が波に揺られていた記憶がある。私も海に行くとホッとする。釣りが趣味である。2 級船舶免許取得。

父は、学業優秀で先生からも高校への進学を勧められたが、学費や汽車通学のお金がなく、やむなく水俣実業学校へ進学した。戦時中は、父も軍国少年で陸軍幼年学校へ行きたいと祖母に打ち明けたところ、祖母は命を粗末にすることはないと泣いて止めたそうである。そして祖母は、この戦争は日本が負けるといったそうである。

祖母は、昭和 23 年に亡くなった。父川本輝夫が 16 歳の時であった。

祖母の死：祖母は、長く病床に伏せており、祖父が読み上げるお経に送られてなくなった。53 歳だった。父の話によれば癌だったようである。

父と原爆：昭和 20 年 8 月 9 日午前、父は学徒動員されたい現在の水俣高校の土手で何気なく天草方面を眺めていた。すると天草の島の上で突然ぴかっと光った後ムクムクと黒い雲が立ち上がりドーンと鈍い音が響いた。

2～3 日後、出月の自宅前を自転車で兵隊が通りがかり水を求めたあと、「長崎に新型爆弾が落とされた。これから鹿児島に伝令に行く。」と言った。

父の兄弟は、長男は祖父がチツソの退職金をはたいて分家させたが、他の男の兄弟たちには、分ける財産もなく皆他家の養子に入った。父は、末弟であったが、川本家の後継ぎとなった。姉と妹も相次いで嫁ぎ、祖父と父は、二人暮らしとなった。

3. 暗雲

昭和 21 年～23 年頃、自宅前の道を挟んだ向かいの家から夜中になると、叫び声ともうめき声ともつかない声が聴こえてきて子ども心に切なかった父から聞いたことがある。

向かいの家は、菓子屋を営んでいたが、戦中戦後の原料不足で商売にならなくなり、ご主人が器用な人で暇を見ては、近所の漁師から船を借りて水俣湾に漁に出て、魚やタコ、ナマコなどたくさん獲ってきていたとのことであった。

息子さんは、歩けば転び、最後は犬の遠吠え状態だった。

最初 7 歳の三男、続いて 15 歳の次男、そして本人と立て続けに 3 人が原因不明の病気で苦しみのたうちまわって死亡した。

最も早い水俣病発症：昭和 21 年 上記の菓子屋家族 原田正純氏が追跡調査

公式：カルテ上さかのぼれるのは昭和 28 年（それ以前のカルテは保存なし。）

公式確認：昭和 34 年 5 月 1 日 チッソ附属病院長 細川一氏

通説：水俣病は昭和 28 年に発症し、昭和 35 年に終息した。根拠なし。

見舞金契約：1. 見舞金契約（1959年S34年12月30日）

「死者30万円、葬祭料2万円、生存患者年金成人10万、未成年者3万円、成人に達したとき5万円。」

※「今後原因が工場排水と判明しても追加補償しない」（第5条）を含む。

→後の水俣病裁判判決で「公序良俗に反する」（つまり破廉恥だと指摘され無効となる）

4. 父と母の結婚

父は、昭和 32 年 2 月に母ミヤ子と結婚した。熊本県球磨郡横井村出身の働き者であった。父の妹が福岡の奉公先で母と知り合い、結婚まで縁があった。結婚したところから父は、手足がしびれ、倦怠感を覚えるようになった。

メチル水銀総排出量：1951年胎児性患者発生 排出量と胎児性患者発生数は比例している。胎児性患者発生ピークは昭和31年～34年である。

へその緒：水俣では、へその緒をとっておく習慣があり、原田先生に私と妹のへその緒の

総水銀量とメチル水銀量を検査していただいた。私も妹も総水銀は、3ppm以上、メチル水銀は、私は0ppm、妹は0.364ppmであった。

1ppm以上は、胎児性水俣病の危険性がある。妹は昭和37年1月生まれ。母は、熊本県の山奥の人吉から嫁に来た。結婚が昭和32年2月で、私が生ま

れ

たのは昭和33年3月である。私が生まれるまでの母のメチル水銀暴露期間は、約1年1ヶ月。私の3年10ヶ月下の妹が生まれるまでの母のメチル水銀暴露

期

間は、4年11ヶ月。約5年間のメチル水銀暴露がへその緒で証明される。

5. 祖父の発病と死

私が生まれた昭和33年前後は、胎児性水俣病患者が多数この世に生を受けている。私の同級生のお姉さんが、胎児性水俣病患者の上村智子さんである。坂本しのぶさんは、近所の一つ上の方である。また、公式確認となる第1号の小児水俣病患者さんの家も近所である。

祖父は、妹が生まれた昭和 37 年前後から、祖父の水俣病症状は徐々に悪化していった。手足のしびれを押さえるために手首や足首を輪ゴムでしばっており、うっ血して紫色になっていた。痙攣、幻視、幻聴がひどくなり、苦しきのあまり、自殺未遂も起こした。

父は、そんな祖父を叱ることしかできなかった。貧しかったため入院費が払えず短期間で退院した。その後も父と母の介護で自宅療養していたが、症状が悪化し、せん妄症状が強く、最終的には、父が勤める精神病院に入院した。

昭和 40 年 4 月、父に看取られて祖父は、亡くなった。父は祖父の亡骸を抱いて慟哭した。

祖父のエピソード：祖父が壮年のころ父と祖父が水俣港を歩いていたら、天草行きの定期船が出港できずにいた。祖父が尋ねたら、船のスクリューに綱が絡まっているとのことだった。祖父は、「俺が潜ってほどいてやる。」と言って、禪一つになって海に飛び込んだ。しばらくして「もうよかばい。」と海から上がってきた。定期船は、やっと出航できた。父から、何回もこの話は聞いたことがある。

やはり子どもにとって父はスーパーマンである。

祖父の松葉杖：祖父が松葉杖について、まだ歩ける頃、私は 5 歳だったと記憶しているが、祖父にお菓子をかうお金をせびった。「じいさん、お菓子ばかうお金ばくれんな。」祖父「お金はなか。」

私は、腹立ちまぎれに祖父の杖を奪うと自宅前の道路中央に置いた。そのまま遊びに行った。夕方帰ってくると玄関に二つに折れた松葉杖が置いてあった。ドキッとした。同時に心から後悔し泣きたくなった。

ほんの 3～4 m 先の松葉杖もとることができず、車に杖が轢かれるのを見ることしかできなかった祖父の気持ちを思うと、やりきれない。

今でも胸が痛む。申し訳ない気持ちでいっぱいである。

祖父と飯炊き：父も母も朝から晩まで懸命に働いた。私が 6 歳のころ、晩飯のご飯炊きは、私と祖父の共同作業だった。祖父は、寝込んでいたが竈にいる私に、『愛一郎、火ば強くせろ。飯が吹き上がったら火ば引け。』と言っていた。

祖父の姿：祖父はあばら家の母屋に寝込んでいた。天井には、明り取りのガラスがあった。ある時民生委員が訪ねてきた。母屋の天井の梁が 30 cm ほどズレているのを見かけて、あわてて後ずさりしたそうである。

5. 父の水俣病事件への関わり

祖父が昭和 40 年に水俣病劇症型で狂い死にしたことが、直接のきっかけであった。祖父の話医者にしても水俣病は昭和 28 年発生 35 年終息したとの通説を、医者が信じており「今頃、水俣病などとそんなに金がほしいのか？」と言われ、悔しかったと父は言っていた。

父は、祖父の死を人権問題として捉えていた。先ず初めに行った父の行動は、熊本県南部人権擁護委員 22 名への人権問題救済を訴える手紙だった。しかし、22 名の人権擁護委員は誰一人返事をしなかった。父は、委員に会いに行った。ある委員は、「そんなに金がほしいのか？」と鼻であしらい取りつく島もなかった。

人権：作家の石牟礼美智子さんの話『初めて川本さんと会ったとき、人権擁護委員ちゅうのはいい加減なもんですばい。』と悔しがっていたそうである。

口癖：父は『人は幸せになるために生まれてきたはずだ。』と口癖のように言っていた。

父のエピソード：子どもの名前 愛一郎 真実子 父の夢は新聞記者になること。

結婚指輪：父は、貧しかったため結婚指輪を買うことができず、自分で作成した。お金がなかったのでステンレスのパイプをカットして制作した。忍び寄る水俣病症状の恐怖を感じながらも、愛する妻のために痺れる指先の遠い感覚を頼りに懸命に作成した。指輪の中央には、やすりでダイヤモンドがカットしてあった。母の指には、擦り切れ半分くらいになった指輪が光っていた。

小学1年生：「よかか、愛一郎、人間は海に浮くとぞ。怖くはなか。見とけ。」と言って坪谷の港の波止場から禪一つになって飛び込んで、抜き手で泳いでみせた。海から上がってきた父は、子ども心にも筋肉隆々として浅黒い肌に、海水が玉を創って流れていた。やはり子どもにとって父親はスーパーマン。

日の丸：祖父の死から2～3年（昭和40年～43年位：小学1年～4年位）が、一番川本家が平和だった。父は、祝日には日の丸の旗を玄関先に掲げた。「愛一郎、今日は憲法記念日ぞ。国旗ば上げなさい。」私が日の丸を上げる当番だった。

入学式の写真：父、母、私、妹の4人で撮った写真。父は、いつもの下駄ばきである。サンダルや靴は足がしびれているので、すっぽ抜けてもわからないので、いつも鼻緒のある下駄や草履、長靴であった。

水俣病認定申請：父昭和43年秋 申請 昭和44年5月29日否定通知
昭和46年（1971）8月 知事認定（新認定患者）

潜在患者掘り起し：昭和44年6月～

※小6 毎日毎晩自転車で出ていく父 ある時たまたま家にいる父に「今日は行かんでよかつかな？」と子ども心に心配したこともある。

6. 自主交渉

父は、昭和46年(1971)11月被害者と加害者が相対して、被害者が加害者に直接苦しみを訴え、償いを求める自主交渉をチッソと行った。

交渉は、あくまで第三者機関でと主張するチッソと平行線をたどった。父たちは、やむなくチッソ水俣工場玄関前に必死の思いで座り込みに入った。

12月進展も展望もないままチッソ東京本社に乗り込んだ。そのまま座り込みとなった。

東京：「ちょっと東京に行ってくっで。一週間くらいで帰る。」と言って、父は玄関を出て行った。まさか計1年9ヶ月の座り込み闘争になるとは、本人も家族も予想していなかった。

ビラ合戦：座り込みの父たちに、水俣市民はあからさまに反対した。私は、中学2年生であったが、水俣市民の9割は、敵だと思っていた。

新聞折り込みに父たち患者側と水俣市民を名乗るグループが、交互にビラをだした。父たちを誹謗・中傷するビラを私も読んだ。非常に悲しかった。

私は、今でも名前を名乗らず『市民』と名乗る輩には、嫌悪感と不信を覚える。

父への応援：東京で座り込んだ父たちに、中学2年生の私と小学5年生の妹は激励の手紙を書いた。私は、大きなこぶしが工場を天から叩き壊している絵を描いた。

妹は、父の健康を気遣いながら患者さんたちのために頑張ると書いた。

父が亡くなった後、写真などを整理していたら私と妹の手紙が大切に保存されていた。

上京：12月26日 母をはじめ夜行寝台車で初めての東京。妹に着せていく服が買えなかったのも、母は夜なべをして毛糸で妹にオーバーコートを編んでくれた。

交渉：チッソ東京本社では、私たち家族が到着する前日に、父たちは強制排除されていた。父たちを支援している水俣病を告発する会の方たちと父たちが、チッソ本社4階に上り、抗議した時に私も同行した。

女優の望月優子さんがチッソの幹部に、抗議文を手渡した。また支援の学生さんたちが数十人もいて父たちを支えていた。『カッコよかった。』

しばらくしてチッソ社員たちと父や支援の学生さんたちが、もみあいになったので、子どもだった私は下に降ろされた。残念。見たかった。

餅つき：年末だったので、チッソ本社前の路上で、せいろ、臼、を持ち込み自主交渉貫徹支援餅つき大会が開かれた。私もそこにいた。支援の方が杵でつくのだが、腰が据わっておらず下手くそで、合いの手の母も大笑いしながらついた。

闘いは熾烈であったが、父たちの闘いは笑いのエピソードに彩られている。

嫌がらせ：郵便物は、熊本県川本輝夫で届く。葉書の裏に大きな字で一言『死ね。』

消火器：朝起きて玄関を開けたら、消火器が置いてあった。『火をつけるぞ。』脅し。

フロ：妹が学校から帰宅すると、風呂のスイッチが入れてあり風呂は沸騰し、水蒸気でフスマ・障子は剥がれ落ちて家中水浸し。

壁蹴り：夜中に家の壁をドンドン蹴られた。朝起きてみると壁に靴跡がいくつもついていた。

電話：父がテレビで『自主交渉派のリーダー川本輝夫さんたちが、本日チッソに交渉を申し入れた。』などと報道されると、決まって夜中の2時くらいに電話がなった。受話器を取ると、切れる。このやり取りが1時間くらい続く。たまにつながると『バカたれが。死ね。』この頃は、ナンバーディスプレイなどはなかった。

父が亡くなった平成11年2月18日、通夜の夜中2時頃、電話がなり母が出ると、『川本のバカが死んだな。良かった。』と言って切れた。その頃は、川本家にもナンバーディスプレイがあったので、頭にきた私は、すぐ折り返し嫌がらせ電話をかけた。それも夜中の2時過ぎに二晩続けて・・・。相手は謝った。

懐中電灯：当時は、いつ暴漢が家に入ってくるかわからないので、2段ベッドで寝る私と妹に母が懐中電灯を持たせていた。暴漢が家に侵入したら、すぐ懐中電灯を照らして、裏口から知り合いの家に逃げ込むようにしていた。

私は、中学2年生で部活は野球部だったので、バットと水俣病患者の浜元仁徳さんから頂いた、コニカの中古カメラを抱いて寝ていた。

暴漢をバットで撃退し、懐中電灯で照らして写真をパチリ。と思っていた。

逮捕：父は逮捕歴3回、強制連行1回であるが、すべて無罪である。

父が起こした刑事裁判、チッソ重役への殺人罪告訴、国・県の水俣病認定業務怠慢を告発した不作為訴訟、川本裁判など、父が勝訴するだろうとの憶測が流れた時に、父は逮捕されている。

父逮捕のテレビニュースを見て、家族は『あら、また逮捕された。まあ、逮捕されるほど元気ちゅうことじゃ。』と笑っていた。

ある時は、夜が明ける前の早朝に家の周りを警官が取り囲んだ。異変に気付いた母が、警官に取りすがり『子どもの目の前では、夫を逮捕してくれるな。』と主張し、私たちが登校した後に、父が逮捕連行されたこともあった。

家宅搜索：川本家では、父の自主交渉座り込みなどで、2回の家宅搜索を受けた。

テレビで我が家の家宅搜索の場面を見たお覚えがある。妹の勉強机を捜査員が教科書やノートを払いのけている場面であった。

カンパ：ある時、支援の方が我が家の玄関で母に『少ないのですが生活の足しにしてください。』と全国から届いたカンパの一部を手渡した。

私は、今でもその場面を鮮明に覚えている。水俣では、周りは敵だらけ。しかし、少数でもカンパや激励の手紙などがあると、人を信じられる。

全国の方の暖かい励ましは、私たち家族を救った。親からもらった小遣いを10円、20円と貯めて送ってくれた小学生や中学生。うれしかった。

また、東京本社前での座り込みテントには、こっそりとカンパをおいていくチッソの社員もいたそうである。

支援：大学生や高校生の若い人たちが、寸暇を惜しんで支えてくれた。父たちの闘いの支援、3度のご飯、カンパ活動など。今でも学生さんたちのあだ名を覚えている。

『学習院・長官・ホサホサ・京子ちゃん・かぼちゃ・カメラ・彰・小百合ちゃん建さん・悠太・・・』ちなみに小百合ちゃんは、今では立派なおっさんです。

母の偉さ：母は、私たちの前では、一度も父の活動を否定しなかった。愚痴もなかった。座り込みで仕事も失い、交渉の展望もない中で、『父ちゃんは偉かつぞ。

患者さんのために闘っている。』と言いつづけた。

私たち兄妹は、『あのような過酷な環境で、よくまっすぐに育ちましたね。』と聞かれる。私たちは『自分たち子どもの出来が良かったからたい。』と笑って答えるが、銃後の守りに徹した母の強さがあったからと思う。

牛乳配達：私も妹も小学5年生から高校卒業まで、朝1時間くらい牛乳配達をしていた。小遣いは、もらった記憶はない。

今でも夢に見ることがある。

電報：昭和48年（1973）3月20日 熊本地裁水俣病第一次訴訟 勝訴

この日は、私の高校入試の合格発表の日でもあった。父は、裁判を傍聴しながらも私の合格発表を気にしていた。母に『愛一郎はどげんやったかい？』と何回も電話があった。3月25日には、父から電報をもらった。

『合格と15歳の誕生日おめでとう。これから苦しい道だ。頑張れ。チッソ社内 父より』今でも私の宝物です。

父の闘い方：小六法、請願権、合法的

原田先生：私の結婚式の仲人、式の最中に原田先生が『愛一郎君、親父さんをどう思う。』と尋ねた。私はきっぱりと『尊敬しています。』と答えた。

スバル360：川本家の初めての車は、原田先生からプレゼントされたスバル360だった。未認定の潜在患者を自転車で走り回っている父を見かねて、原田先生が、水俣病の雑誌の書いた原稿料5万円で買ってくれた。

父の潜在患者発掘作業は、スバル360で飛躍的にひろがった。この車に父が人を乗せるときは、『ドアは握っておいてくれな。いつ開くかわからんで。』と笑っていた。

ある時、父と車に乗っていると坂道で『愛一郎、後ろば見てくれ。排気ガスの色はどげんな。』『父ちゃん、もうもうと紫の排気ガスが出とるばい。』父『そんならよか。』

思い出：3年前、原田先生たち民間の医師140名、看護師などボランティア600名で、不知火海沿岸住民の水俣病検診があった。私も原田先生の娘さん利恵さんに誘われて、お手伝いという形で原田先生の診察に2日間密着した。

天草の御所浦での検診で、70歳代の夫婦が来られた。結婚して50年になるという。ご主人は、手足の感覚障害や震え、運動失調など著明であった。奥さんは、ご主人よりも症状は軽かった。

原田先生は、ふと思いついたように『結婚して50年も同じご飯を食べているのに、なぜこんなに症状が違うのかな？奥さん、流産したことはありますか？』奥さん『4回あります。』

原田先生は、周りの私たちを諭すように『4回も流産したの。それは辛かったね。でも4人の赤ちゃんがお母さんを救ってくれたんだよ。4人の赤ちゃんが、メチル水銀という毒を自分の命と引き換えに吸い取ってくれたから、奥さんの水俣病症状はご主人に比べて軽いんだね。』と言った。

父が亡くなった時、原田先生には、告別式での弔辞をお願いした。告別式当日水俣に来られてからお願いだった。原田先生は、『わかった。何も用意してないけど、川本さんとは同じ釜の飯を食った戦友だから大丈夫だ。』と言われた。

原田先生は、『川本さんは、水俣病患者救済活動などで家を空けることも多く、家族にも迷惑をかけ通しだったと思う。決して家庭的な普通の父親ではなかった。しかし、川本さん、今日は、こんなにたくさんの方が全国から駆け付けて来ています。家族をはじめ、こんなにたくさんの方に愛されていた川本さん

は、幸せと思う。川本さん、やっと安息の日々がきましたね。ゆっくり休んでください。お疲れ様でした。』と結んだ。

原田先生の手には、白紙の弔辞があった。

孫の世話：集会などに私の長男を連れていくことがあった。じっとしていない孫に振り回されながらも嬉しそうであった。ある時、熊本県庁で交渉があった。いつもより父はせっかちに回答を求めた。早く切り上げようとする父に支援の人が聞くと『孫の保育園の迎えがあつて。はよ帰らんばいかん。』

私の長女を散歩させるときは、長女の腰にひもを巻きつけて犬の散歩のようにしていた。

長男の保育園で父が迎えに行くと、園の中に向かって保母さんが『輝夫君、お迎えよ。』と声をかけた。長男の名前は、祐輔です。

お地蔵様：父は、水俣の百閒排水溝の正面に地蔵菩薩を設置した。親水公園のお地蔵様は全て海に向かって設置されている。父が設置したお地蔵様だけが、水俣病事件発生の原点である、チッソ百閒排水溝の正面に向かっている。

新潟の阿賀野川の河原の石で作られ、新潟の水俣病患者・支援者から送られたお地蔵様である。

新潟には、父が送った水俣川の河原の石で作られたお地蔵様が設置されている。

父のお地蔵様は、熊本県の所有地である埋立地に立っている。もちろん無許可である。設置経過を映画監督の土本監督が記録しているが、いかにも父らしく楽しそうに『県の所有地か知らんばってん、我々の税金で作った公園ばい。お地蔵様の設置権はあるばい。』 確信犯である。

肝臓がん：平成11年（1999）父肝臓がんで逝去。67歳。全国から500人以上の方にご参列いただいた。

父が残した言葉：『熱意とは、ことある毎に意志を表明することに他ならない。』
